

戒淨上人と田中木又先生

東京都 田中 木又

元慶応大学教授

聖者の皮肉骨髄について

木又先生はよく「聖者の皮肉骨髄の髓を承けていられるのは戒淨上人だ。しかし上人は髓ばかりを説かれる。もつと応病与薬のご説法をして下さるとよいのだが」と昭和三十年代終り頃までよく仰言った。「皮肉骨髄」とはもと宋の承天道原の撰述した『景德伝燈録』の「菩提達磨」の箇所にある。弁栄聖者はこれを引用して『宗祖の皮髄』を講ぜられたが（『宗祖の皮髄』四―五頁「題号の略解」参照）、いわゆる安心起行による得道

の浅深など二義を中心テーマとして浄土宗宗祖法然上人の皮髓を提示されたものである。

元来応病与薬の対機説法は大円鏡智と妙観察智を開いた従皮徹髓の達人においてこそ可能なもので、後には先生は全くこれを口にせられる事なく、晩年はしきりに上人の熱血溢れる正法護持と破邪顕正の光明主義二祖としての行履に随喜渴仰せられた。御遺稿編纂をライフワークとせられた先生は、このようにして御遺稿解釈の指南を遂に、上人に依恃せられるに至り、逐次発表せられる上人の口訣も「自分が跋文を書いてもよいから是非上梓するように」と関係者に懇懇せられた。

戒浄上人の学風について

ある時先生は「学界では戒浄上人の学究的態度は狭すぎると批評する者がある」と仰言ったことがある。それで小生（杉田善孝）はその時次のような私見を先生に申し上げた。――

戒浄上人は十六歳の時の著作『生死輪廻論』の結句に対する野上運海師の批評によつて、爾来知識欲のために読書するのを止め、専ら解脱のために研学されるに至つたと自ら述懐していられる。それは上人の行実を見ればよく分る。もし敢えて超一流の学者にこれを求めるならば西田幾多郎博士ではないかと思われる。

博士の参禅は猛烈を極めたがその『日記』の中で、「余は禅を学の為めにすは誤りなり。余が心の為め、生命の為になすべし」と言つていられる。お二人はこの点に関する限り、軌を一にしていられると思う。博士の人生と学問のモットーはケール博士から学んだ「広からねど深く」(Non multa, sed multum)であった。上人もケール、西田両博士の教えを東大や四高で受けられたが、西田博士は上人と違つてやはり学者だったから、所証底を自己独創の論理で構築する事に努力された。それとは逆に強靱な思索より鋭い客観

世界の分析へ、求心的より遠心的へ、内面より外面への研學志向は、つまる所は、皮相に拡散、いわゆる淺^{あや}広^{ひろ}と結果せざるを得ないのではないか。——との旨を率直に申し上げると、木又先生はにつこりと笑つて共感を示し下さった。

『礼拝儀』のあげ方について

光明会には「礼拝儀」乃至「歎徳章」誦誦が聖者の直弟子方によつてレコードに録音されているのが二種類ある。それについて木又先生はこう仰言つた。「二種類のレコードを聞くと大分節廻しが違うから、後世の人は困るでしょうね。しかし戒浄上人は聖者に値遇以来毎月許す限りは聖者を自坊に屈請して、檀信徒への結縁のほか、御自身の御教導も仰いで、慶運寺御滞在中は聖者とお二人だけで「礼拝儀」の誦誦やその節廻しの御教授も受けられた。だから「礼拝儀」のあげ方はやはり戒浄上人を規準とする方がよいと思います」と。

弁栄聖者御内鑿の過程

弁栄聖者の御内鑿については、先生は「日本の光」の所々にお述べになっているが、いつだったか唐沢山別時会の際、この問題についてお伺いした。

すると先生は、「私は聖者の御遺稿や高弟大谷仙界上人、佐々木為興上人等の御随行中の見聞を拠り処に私が「日本の光」の中に書き下ろしたのです。今戒浄上人が明らかにされた師父聖者の眞精神とその御内鑿の過程は、後代のためまとめて発表して下さることが、光明主義と光明会のため頗る大切だと存じますので、是非宜しく願ひします」と仰つた。